［関西大学］

何処から来て何処へ向かうのか
―関西大学応援団の過去と今とこれから―

村井 智史　関西大学応援団監督

1 応援団設立までの歴史や経緯、活動内容

関西大学応援団は１９２２（大正11）年４月、関西大学が新学制による大学令を受け、前身である「関西法律学校」から大学の認可を受けた年に創設された。応援団団歌にも詠われているその年は、関西大学にとって大きな節目の年であり、「学理と実際の調和」や「国際的精神の涵養」など、当時の大学当局の理念が教育内容の充実として強く打ち出された。９月にはその理念を反映した関西大学学歌が制定され、翌年４月には、学生歌が誕生した。

１９２０年代は、体育奨励のもと、運動部が黄金期を迎え、応援団の存在もまた力強く成長を遂げた。特に相撲部が全国学生大会で優勝した際の熱狂ぶりは記録にも残っており、応援団による激励やブラスバンドの声援が試合を大いに盛り上げた。１９２４年にはスクールカラーとして紫紺（アスターパープル）が採用され、応援団旗にも反映された。また、１９３３年には応援団の象徴である「千成瓢箪（せんなりびょうたん）」が製作され、戦時中には通信隊の兵士たちが戦地への守り札として持ち去るほどであった。

戦後、１９４６年に応援団は復活を遂げ、当時団長を中心に５００名の学生が千里山グラウンドに集い、結成式を実施。１９５２年には団旗・千成瓢箪の保護と親和のため「親衛隊」が誕生し、１９５４年には応援活動を支える吹奏楽部も創設された。翌年には団報が創刊され、団の活動を広く社会にも伝える役割を担った。

１９６１年には、全国に先駆けて応援団近代化の一環としてバトン・トワーリング部が創設された。後に一時休止を経て１９８０年に再始動した。

また、かつての指揮部と親衛隊がリーダー部として統一され、リーダー部、吹奏楽部、バトン・トワーリング部の３パート体制となり、バトン・トワーリング部は、１

998年にはバトン・チアリーダー部へと名称を改めた。
時代の変化に応じて応援団のあり方も進化し、2014年にはバトン・チアリーダー部、2016年にはリーダー部から女性団長が誕生。伝統を守りつつ新たな形を模索してきた。そして、現在関西大学応援団はリーダー部・吹奏楽部・バトン・チアリーダー部の三部構成で活動しており、団員数は170名にも及ぶ。

2 大学・学生等にとってどのような存在か

現在、関西大学応援団は103代を迎え、「繋」という活動方針の下、大学行事や応援活動など、母校関西大学のために積極的に活動を行っている。
応援活動においては、硬式野球、アメリカンフットボールを中心に、陸上競技、準硬式野球やその他の体育会の応援活動を行っている。さらに、全国大会に出場するとなれば、全国の会場に赴き、関大を勝利に導くために応援している。学校行事においては、入学式・卒業式・オープンキャンパスにおいて演舞演奏を披露。これらのことから、まさしく「関西大学行くところ応援団あり」を体現しているといえる。

3 大学内外の反響

関西大学応援団は、現在大学内外から大きな注目を集めている団体であるといえる。大学内での反響は先述のとおり、いうまでもない。学外においても、企業からの演舞演奏の依頼や、テレビなどからの取材依頼など大きな注目を一身に浴びている存在であると考えている。
これからも、関西大学応援団は全国の模範たるべく、時代に応じた応援スタイルを追求しながら、伝統と誇りを胸に歩みを進めていく。その一助となるべく、監督である私自身も邁進し、支援を惜しまない所存だ。

関西大学応援団のパフォーマンス

［東京農業大学］

変わりゆく応援団の一コマ
―利他の心で紡ぐ人々の共感―

木原 高治　東京農業大学国際食料情報学部教授・全学応援団顧問

「大根踊り」で知られる東京農業大学全学応援団の設立は94年前の1931（昭和6）年6月19日までさかのぼる。この時の名称は、「東京農業大学全学学生応援団」。団則や団旗も制定され、団旗を支える旗竿は、「皇室の警護や公式儀式に儀仗した近衛騎兵の槍」を下付されたものであった。

もっとも、本学が設立された1891（明治24）年から間もない明治30年代には、その時々ではあったが、すでに運動部の対外試合で全学生が団結して応援を行っていた。また、1913（大正2）年には応援の統制をとるために初めて応援団長が選ばれた。そのような歴史の中で、「永続性のある学生活動の拠り所とするため、応援活動を学校当局に認可させる」という学生の思いが応援団設立の端緒を開いたのであった。そのため、本学の応援団には、今なお学生自治組織的な性格が残っている。

第二次世界大戦の戦禍で渋谷区青山常盤松の校舎を焼失し、ゼロからのスタートとなった本学の戦後復興を支えたのも応援団である。「団結なくして母校の発展はなし」との標語の下、「勉強のできる環境作り・運動場の整備」に向け全学生の協力を引き出すことに尽力した。そして、1948（昭和23）年2月16日に予科、専門部、学部の応援団を統一し、「東京農業大学全学応援団」として戦後の活動を本格化した。

1953（昭和28）年にはブラスバンド部（現在の吹奏楽部）が創設され、さらに1977（昭和52）年にはバトントワラー部（現・チアリーダー部）が創設され、現在の3部体制ができ上がった。さらに、1989（平成元）年に開学した北海道オホーツクキャンパスにも支部が置かれ、本部の伝統を引き継ぎ、リーダー部、チアリーダー部、吹奏楽部の3部体制で運営されている。

2025年時点での部員数は、リーダー部15名、チア

リーダー部21名、吹奏楽部72名。総勢１０８名が応援団活動を支えてくれている。そのうち、リーダー部2名を含めた部員数の約70％は女性である。今や応援団の伝統であった男気を鼓舞するバンカラ気質は影を潜め、女性が応援団活動を支える大きな力となっている。

そうした状況もあってか、近年では、応援活動を通して「他者に貢献する」といった、利他の精神あるいはボランティア精神に惹かれて参加する学生が増えてきた。例えば、競技団体の規定で応援に楽器を使ってはいけない場合には、吹奏楽部やチアリーダー部の部員が、いつも以上に声を振り絞って応援している。ひたすら選手を鼓舞し、彼らの勝利を願う姿には、純粋な利他の思いを感じる。

彼らの活動は運動部の応援だけにとどまらない。入学式・卒業式等の大学行事はもとより、地元の商店街や神社のお祭り、警察署の交通安全イベントへの参加など、地域に密着した活動も行っている。特に地元とは戦後のキャンパス移転から80年、相互の信頼関係が醸成され、「リーダー公開」などを楽しみにしてくださっている近隣の方が多い。

変化が激しく物事が複雑化している現代においても、利他の心を持って行動する彼らの姿は、人々の共感を呼んでいる。多くの方に愛される応援団を目指して、試行錯誤を重ねながら日々練習に励んでくれている。ありがたいことだ。

（参考資料：東京農大全学応援団「応援歌集」）

北沢交通安全の集いでのパフォーマンス

［西南学院大学］

三位一体となって、応援団再興へ

河原 真也　西南学院大学外国語学部教授

西南学院大学の応援指導部は、応援団、吹奏楽団、チアリーダーの3つの団体から構成される。通常はそれぞれ独自の活動を行っており、三部が一体となって応援するのは、硬式野球部の西福戦（西南学院大学ＶＳ福岡大学）での応援合戦や、入学式・同窓会などの学内行事である。コロナ禍前は、ＯＢ・ＯＧを招いての応援指導部全体の懇親会があったが、近年はその伝統も途絶え、三部の横のつながりがなくなりはじめているのが目下の悩みとなっている。

１９５５年に創設された吹奏楽団は、常時約30名の部員が在籍し、九州吹奏楽コンクールで銀賞を獲得するなど、定評ある演奏の歴史をもつ。かつては『男はつらいよ 花も嵐も寅次郎』（１９８２年公開）の舞台ともなった大分県の湯平（ゆのひら）温泉で夏期合宿を行い、演奏の練習だけではなく、地元民との交流を通して人格を陶冶（とうや）する活動も行っていた。利用していた施設が廃止されたため、残念ながら今はその伝統は途絶えてしまった。近年は、ゴールデンウイーク中に福岡で開催される「博多どんたく港まつり」において、ＪＲ西日本とコラボレーションしたパレードを行うことで地元では知られている。

１９６５年に創設されたバトントワラーズが元となったチアリーダーは、当時存在した短期大学部の学生が主たるメンバーの団体であった。一時休部状態となり、本格的に復活したのは１９９３年のことである。ハーティーズ（Hearties）という名称をもち、こちらも部員は約30名在籍している。体育会の各団体の公式戦で華やかな応援活動をする一方で、チアリーディング全国大会の競技部門において、好成績をおさめてきた。２０２４年に開催された全国学生選手権では、競技部門（女子）において過去最高の全国第7位の好成績をおさめた。秋の学園祭では模擬店出店の際に部員たちとの撮影会などを行い、人気を博している。

応援指導部の中で一番歴史をもつのが応援団である。1954（昭和29）年に創部し、最盛期には30名以上の団員を誇っていた。北部九州にある応援団を有する大学との交流の場「九演会」では、伝統ある演舞で存在感を示してきた。大学史関連の資料を紐解くと、バンカラ要素を前面に出した応援団の学生たちの活躍ぶりが見受けられ、往時が偲ばれる。面白いのは、九演会用のパンフレットにある企業協賛の広告欄である。おそらく当時の学生やOBたちが通っていたであろう、九州を代表する歓楽街・中洲のスナックの広告が多数見受けられるのだ。そこには宣伝文句とともに、学生料金も提示されており、「夜の応援団」という一面も窺い知れる。

2000年代になり、バンカラ気質も失せ、応援団への入部希望者は徐々に減少していく。一時活動を休止した時期もあったが、2020年に1人の女子学生が入団し、卒業までの4年間、たった独りで応援団を支え続けた。彼女の応援団としての活動の様子は、全国ネットのテレビ番組でも放映され、地元福岡ではそれなりに認知される存在となった。その後、番組を一視聴者として目にし、その姿に憧れを抱いた熊本出身の女子学生が入団するに至った。彼女は3年次から2年間、団長として独りで応援活動を行い、現役学生だけでなく、多くのOB・OGたちにエールを送り続けた。

その彼女も卒業した本年度、再度休部の危機を迎える事態になろうとしていた矢先に、1人の男子学生が入団し、応援団の歴史をなんとか継承するに至っている。そしてこの6月に神宮球場で開催された全国大学野球選手権大会に出場した硬式野球部の応援に、応援指導部のメンバー全員とともに筆者も駆け付ける機会に恵まれた。雨が降る中で、野球部のスタンド応援組とともに、「コンバット・マーチ」、「サウスポー」、「ルパン三世のテーマ」など定番の応援歌で野球部の必勝を祈り、精いっぱい応援する部員たちの姿を目にすると、時代は変われど、応援指導部に流れる西南魂は今でも生き続けているのだと感銘を受けた。

応援指導部。2025年6月10日、神宮球場にて。